

遷延性意識障害患者に対する背面開放座位の効果 ～表面筋電図の解析～

¹自動車事故対策機構 千葉療護センター 看護部、

²自動車事故対策機構 千葉療護センター 診療部 検査科、³聖路加看護大学

○植田 愛子¹、石塚 京子¹、内山 成恵¹、小嶋 昌子¹、吉沢 純子¹、松井 宏峰²、大久保 暢子³

～表面筋電図の解析～

【はじめに】近年、脳血管障害や交通事故による重度頭部外傷で遷延性意識障害となった患者に背面開放座位が自律神経に刺激を与えるケアとして意識覚醒に有効であるという報告がある。本研究では座ろう君による背面開放座位を導入後、その効果をNASVAスコアによる意識レベル及び表面筋電図(以下筋電図とする)による生理学的指標から検証した。

【対象・方法】千葉療護センター入院患者8名。平均年齢 45.8 ± 18 歳(男性7名・女性1名)患者入院後、早期に連続10日間、その後1～2週間毎、1か月毎、仰臥位・車いす乗車・座ろう君での座位で筋電図を実施した。頸部僧帽筋と脊柱起立筋の左右4部位に電極を貼付し、2分間の筋電図をとり、筋肉の緊張状態を解析した。その結果とNASVAスコア、写真撮影で記録した実施中の姿勢を比較検討した。

【結果】脊柱起立筋と頸部僧帽筋は、座ろう君>車椅子>仰臥位の順で、筋活動の割合は高かった。また、NASVAスコアにおいて重度な患者は、軽度な患者より姿勢変化による筋活動の差は大きい傾向であった。

【考察】看護ケア時の観察では、患者を背面開放座位にすると自力で頸部保持が行え、頸部筋の訓練になっている印象があったが、本研究によって、その臨床知が筋電図の視点から検証できたと言える。また、軽症よりも重度の意識障害患者に対して、背面開放座位は筋活動の点から効果をもたらす可能性も示唆できた。遷延性意識障害患者に背面開放座位は、車いすなどによる背面を支えた姿勢と異なり、筋力強化に効果的な姿勢であり、価値のある方法であると考えられる。